

『グッドナイト&グッドラック』

2005年／アメリカ／ジョージ・クルーニー監督作品

報道のあるべき姿とは 権力と戦ったジャーナリストたち

会員 鈴木 さとみ (63期)

『グッドナイト&グッドラック』【通常版】
DVD 発売中 3,990円(税込)
発売元・販売元：株式会社東宝
© 2005 Good Night Good Luck, LLC.
All Rights Reserved.
※DVD 発売情報は2012年3月現在のものです。



この作品は、1950年代のアメリカで、ニュースキャスターであるエドワード・R・マローとCBSスタッフが、真実の報道のためにマッカーシズムと戦った姿を描いたノンフィクション作品である。

公開は2005年だが、当時の雰囲気を出すためモノクロの作品となっている。また、全体を通じてジャズが流れていて、大人の映画という雰囲気である。

1950年代のアメリカは冷戦下にあり、マッカーシー上院議員が赤狩りを行っていた。その中で、空軍に所属していた人が、親や兄弟が共産党員だという内部告発があったというだけで、事実調査もなければ適正な手続きも経ずして空軍からいきなり除隊勧告を受けたという新聞報道がなされる。この新聞記事を見たマローらは、自分たちの報道番組の中でマッカーシーに対して異議を申し立て、マッカーシーと戦っていく。また、マロー自身もマッカーシーに歯向かったことで共産主義者だと決めつけられる。このような恐怖政治はおかしいと思う良識人も多くいたようだが、誰もが、次は自分が標的にされるのではないかと恐れて発言を控えるような時代であった。

そのような中で、マローやCBSのスタッフらが、ジャーナリズムとは真実を報道することであると信じ、勇気を持って、マッカーシーに挑んでいく。また、会社経営を優先させようとする会社トップに

対しても、報道のあるべき姿を説いていく。彼らの信念と仲間を信じる姿が描かれている。また、報道の現場もリアルに映し出されている。

世の中が、一方向に流されているときに、「それは違う。」と大衆に向かって言うことは勇気のいることだと思う。また、権力に対して、言葉の力で厳然と立ち向かうことも勇気のいることだと思う。マローらはそれをやってのける。また、映画の中では、人は生まれながらにして自由であることや、適正な手続きを踏まなければ不当な処分を受けないことなども述べられている。ジャーナリストも、本来、人の権利を守るという役目があるはずなのである。ジャーナリストの仕事と法曹の仕事の間には共通項があると思った。

グッドナイト&グッドラックという言葉は、マローらの報道番組「See It Now」の最後に、マローが、「Everybody, good night and good luck」とあいさつすることに由来している。マローのあいさつをする姿は、格好いい。登場人物のほとんどが、半端でないほどのヘビースモーカーで、肺がんにならないかと思わず心配してしまったが…。だが、そこに、また現実のやるせなさというようなものも感じられて映画の雰囲気を出している。たまには、大人の硬派映画を、と思われた方は、是非ご覧になってください。